

Th. リットの精神科学的教育学における「個性(化)」概念

山下 泰子

„Individualität“-Begriff in der geisteswissenschaftlichen Pädagogik bei Th. Litt

Yasuko Yamashita

Dieser Aufsatz untersucht einen „Individualität“-Begriff in der geisteswissenschaftlichen Pädagogik bei Theodor Litt, indem er sich auf einen Leibnizs Gedanken beruht. Litt findet das Wesen der einführenden Tätigkeit, den Zugang der Seele des Zöglings zur gestaltenden Welt des Geistes zu bahnen, in der sprachlichen Vernunft, die eben die „Individualisierung“ des Bildungsideals leisten kann. Dieser Aufsatz denkt, daß die Individualität bei Litt aus Leibnizs <Monadologie> entspringt und sie einen großen Einfluß sowohl auf Litts <Wissenschaft vom Geist>, als auch seine Pädagogik ausübt, und klärt daher besonders folgende Frage danach, was Litt von leibnizischem Gedanken aufgenommen und kritisiert hat.

キーワード : 個性(化), パースペクティブ, 陶冶理想, 言語, 形成力

はじめに

リットは、「指導か放任か」において、「指導」と「放任」の両立場の諸特質を満たす予備指導、即ち精神の形成的世界への(生徒の)心の接近を容易にする教育活動の本質を言語的理性(sprachliche Vernunft)に見出した。言語的理性は、「現代の哲学とその陶冶理想への影響」における真の生活の弁証法—生活と理念の相互抗争—による陶冶理想の個性化(individualisierung des Bildungsideals)を行なう能力、即ち人間の自己形成の能力である。この著書における「個性(Individualität)」概念は、思想史的には、18世紀のライプニッツの<モナド>論に遡ることができる。リットの個性概念は、魂が精神へ発展する過程において、魂がその完全性の程度に応じて神に創造された世界の秩序体系を鏡に映して模倣する、即ち表象するというライプニッツの<モナド>論と深く関連している。特に、モナドが世界の秩序体系についての真理を通して自己意識を獲得する、即ち(神の)恩寵を受けて固有のパースペクティブの視点から世界についての真理を表象すると共に、幸福と感謝の徳を持つに至るというライプニッツの認識論と道徳論の連結は、へ

行動科学大講座

ーゲルを介して、リットの精神科学—構造論—及び教育学に強い影響を与えた。そこで、本稿は、リットのライプニッツの思想に対する疑問点と継承点を明らかにして、彼の精神科学的教育学における「個性（化）」概念を解明したい。

Ⅰ. リットの精神科学とライプニッツのモノダ論

ライプニッツ（1646—1716）は、17世紀の自然科学の発展の基礎にあるイギリスの経験論とドイツ民族固有の精神性を結合することに心血を注いだ。即ち彼においては、合理主義的、数学的な自然科学の〈認識論〉と道徳を経験に従属させる、ロックに見られる様な倫理学を断固として拒否するドイツ精神の神への憧憬に由来する〈道徳思想〉の連結が見られる。人間は、魂を世界（宇宙）の秩序体系の真理へ導くことによって、この真理についての知識と共に、自己意識についての知識も獲得して自己自身を道徳的に導くことができる。即ち認識論を道徳的な自己意識及び徳の獲得の方法として、即ちそれを完全性の目標の実現方法として位置づける点に、ライプニッツの真骨頂がある。自然、即ち神の被造物（物質、生物、エンテレケイアまたは魂）を包摂する全世界の秩序体系についての真理を知ることから自己自身を知ることへ自己発展（Entwicklung）する〈精神〉の明晰さへの動的過程において、道徳的な価値及び幸福が実現されるという彼の思想は、リットによれば、ドイツ思想史上、かつて無かったものである¹⁾。

(1)ライプニッツのモノダ論—「個体（性）化」の原理—

（神に）創造された全ての存在、即ち全てのモノダ（Monade）は、内的原理から変化を受けて、外的原因によって何ら影響を受けない。ライプニッツによれば、この変化は各々のモノダの中で連続的に行なわれる。—（Einheit）、即ち単純なモノダにおいて多（Vielfalt）、即ち多様な表象（Perzeption）が生じる。それらは、モノダの欲求においてある表象から他の表象へと変化する。彼は、表象し欲求するモノダを魂（Seele）と呼んでいる。欲求は、完全な表象全体に到達することができるとは限らないが、ある表象から影響を受けて新しい表象に到達する。各々のモノダは、植物、動物、エンテレケイア（Entelechie）—完成態の意味—または魂等に分かれる。人間の魂は、単純なモノダ以上のものである。彼は、「モノダ論」（1714）において、「必然的で永遠の諸真理の認識が、我々と単なる動物を区別する、またそれが我々を我々自身と神の認識へ高めることによって我々に理性と科学を所有させる。」²⁾と述べている。彼によれば、諸理念の直観的認識と論証的認識以外の全ての所信あるいは臆見—感覺的認識も含む—は、厳密には認識ではない。我々の外にある可感的な事物についての事実の真理は、理性の真理を介して検証される。即ち（科学的）認識は、諸現象の感覺的認識の中に数学的または叡知（理念）的真理を発見する事態である。事物の可感的性質についての理念は、〈感覺〉から我々の内に来る。自然の質料は、部分としてそれ固有の運動を持っており、質料の各々の部分—魂も同様に—は、世界を表象することができる³⁾。人間は、全ての被造物の中で、感性的魂をもつ他の生物と異なっており、理性的魂、即ち精神（Geist）に到達することができる唯一の実体（Substanz）である。感覺は、さしあたり混雑した表象に起因している。彼は、「新人間性論」において、「偶然的、個別的な事物の真理の根拠は、正に叡知的諸真理が要請する様に、感覺の諸現象を結び付けることに成功する点にある。」⁴⁾と述べている。即ち感覺的な諸現象は、叡知的真理を欠いている場合は、依然として混雑した表象に過ぎない。

ライプニッツの魂は、神及び世界の秩序を表象する、即ちあらゆる形相あるいは本質を表象するという性質を自分の内に持っている。「何物も外から我々の精神の中に入っては来ない。」⁵⁾、「理念は、根源的に我々に内在している。我々の考えすら、他の被造物が魂に直接的な影響を与えることなしに、我々固有の根拠に由来している。ちなみに、普遍的で永遠の真理に関しては、我々の確実性の根拠は、感覚から独立した理念そのものの中に在る。」⁶⁾ リットによれば、ライプニッツの、人間の精神による真理の把握 (Ergeifen) は、「以前に存在しなかったものを創造すること (Schaffen)」や「外で待ち受けていたものを取り入れること (Hereinholen)」でもなく、まして「それを目指して自分から外へ出て行くこと (aus sich Herausgehen)」でもない。⁷⁾ 「あの外的な一切の影響を遠ざける魂の孤立性」は、所謂モナドの「無窓性 (Fernselosigkeit)」の原理と呼ばれている。リットは、「ライプニッツとドイツの現代」において、「彼は、無窓性とその様に完結したモナドに、それ固有の一回的な比類無き生命内容の全く邪魔されない、また逸らされない発展を保障するが故に、その無窓性に重きを置くのである。」⁸⁾ と述べている。だが、この無窓性の解釈は、(1)モナドは如何にして世界の秩序についての真理を知ることができるのか、また(2)何故に、また如何にしてモナドごとに多様な個体（性）化が生起するのかの問いに十分に答えることはできない。

(1)モナドは、如何にして世界の秩序についての真理を知ることができるのか。

リットは、魂の生命内容 (Lebensgehalt) が生得的なもの、即ち前成 (Präformation) を含む種子 (Samen) として、それ自体で完全に自己展開すると見做している。だが、これで、〈無窓性〉と〈魂の精神への発展〉は矛盾なく論述されることができるのか。彼は、あたかも生命内容だけで人間は世界の秩序体系についての真理を認識して、それによって道徳的に行為することができるのかの様に解釈している。ライプニッツによれば、ある生物の同一種子でも環境によって形、色、性質が異なって成長する様に、モナドは他のモナドとの言葉（理念）による依存関係—連結または〈適合 (Anpassung)〉—及び可能なもの〈完全性の程度〉において存在する。彼によれば、「一方のモナドが他方のモナドにただこの手段（理念的影響—筆者挿入）によってのみ依存し得る。」⁹⁾、「各々の可能なもの (das Mögliche) は、それが含む完全性に応じてその存在を主張する権利を持っている。」¹⁰⁾ 生命内容または可能なものは、他のモナドとの関係や意志、欲求に基づいて、それなりの完全性に応じて世界を表象することができる。ライプニッツの完全性は、決して完璧や全面的の意味ではなく、特殊的、一面的な意味における完全性である。従って、各々のモナドの生命内容は、その可能性の程度において完全性を発揮するに過ぎない。彼は、感性的魂と理性的魂、即ち精神の間に多くの差異を見出して、「現実的な受胎によって選ばれたものが人間の本質（精神—筆者挿入）に達する」¹¹⁾ と述べている。当時の生物学は、まだ唯物論的な進化論の水準に達していなかったが故に、一見すると、魂の精神への発展は生得的なものだけで可能であると彼が考えているのかの様に解釈することができる。けれどもライプニッツの無窓性は、彼が「形而上学叙説」の第26項においてプラトンの想起説に同意しているが故に、魂が内的なものに対立する外的なもの、例えば環境や教育に対して門や窓を閉じているという意味ではないのである。¹²⁾ では彼は、一体、何故に無窓性を強調していると考えるべきであろうか。彼の本意は、次の命題、即ち「普遍的で永遠の真理に関しては、我々の確実性の根拠は、感覚から独立した理念そのものの中に在る。」に見出

されることができる。即ち彼は、直観的認識と論証によって神及び世界の秩序体系を直観的に基礎づける理性の、それが現実となる以前の生得的なもの、即ち形相が既に魂の中に存在することを強調しているのである。だが、外的なものに対する無窓性は、魂の精神への発展の過程、即ち現実化の過程に対しては無論妥当しないと言わねばならない。もし魂は、それが外界の諸現象の感性的認識や区分された諸学問の教授を受け入れなければ、それに対応する世界の秩序の直観的認識へ発展しないのである。

(2)何故に、また如何にしてモノダごとに多様な個体(性)化が生起するのか。

では、ライプニッツのモノダが全て世界についての認識を可能にする諸理念を生得的に同等に所有しているのかどうか問題である。彼は、確かに「時間と場所の差異の他に、〈区別の内的原理〉が常にある。」¹³⁾と述べている。彼は、モノダが現実存在として時間と場所に固定され、二つと同じものはないこと、また可能性としても感性的魂と理性的魂の間に多くの差異があることを認めている。しかし、たとえ区別の内的原理—動・植物の区分は別として—が、魂の中にある諸形相の所有についての区別であるとしても、現実存在としての各モノダの差異は時間あるいは時代と場所に無関係ではなく、世界についての諸理念の所有の生得上の差異に帰着しない。この問題—区別の内的原理の真偽—は、実際に人間の場合は、ア・ポステリオリに証明不可能であると思われるが、彼は、「形而上学叙説」の第13項において人間の「自由意志による選択」を認めているが故に¹⁴⁾、魂が生得的に決定されているのではなく、多様な可塑性をもつことを承認していると思われる。

ライプニッツは、「モノダの諸表象と物体の法則の間には、初めから能動原因の体系と目的原因(究極原因)の体系の間に築かれている完全な調和がある。」¹⁵⁾と述べている。彼によれば、自然には、運動の法則が支配する物理的領域と神の意志と恩寵が作用する道徳的領域があり、この二つの自然の領域は調和している(所謂、予定調和説)。ここに、運動の法則に従う<身体>と目的原因に従う<魂>の統合が基礎づけられている。世界の中心(統合)原理である神には、能動原因、即ち運動の法則と目的原因、即ち神の摂理、知識、生産を生み出す意志が属しており、それらにモノダにおける個(性)的中心、表象能力、欲求能力が対応している。彼は、「魂は、一般に被造物—世界—の生きた鏡または模像であり、それに対して精神は、なおまた神性そのものの、即ち自然の創作者の模像である。」¹⁶⁾と述べている。各々のモノダは、その完全性の程度に応じて、神の属性を模倣しているに過ぎない。しかし、ライプニッツの『モノダ論』をドイツ語訳したH・グロクナーは、「精神は、神の作品を表象するだけでなく、しかもそれらと類似したものを、たとえ少量であるにしても、生産することができる。精神だけが、創造的に活動する資格がある。」¹⁷⁾と述べている。即ち精神による創造的な学問的探求や生活諸領域における実践は、神の被造物である世界についての単なる表象ではなく、世界の秩序の部分的な生産(創造)である。ライプニッツは、「同一の都市も様々な方面から考察するならば、違った様相を呈し、また観点次第で幾つにも見える様に、言わば無限な数の単純な実体(モノダ—筆者挿入)のために、正に同じ数程多くの世界があることになる。だがそれらは、個別的なモノダの異なった視点(Gesichtspunkt)に応じた唯一の宇宙の様々な眺望に他ならない。」¹⁸⁾と述べている。もしそうであるならば、異なった視点から形成された世界秩序についての見解、即ち諸々の世界像は、感覚的認識に対応する諸理念に応じて形成されることになる。各々のモノダは、(神の)意志と恩寵を受けて、認識を欲求し、それなりの

完全性を発揮することができる。かくして、モナドは、目的原因としての神を認識するに至り、幸福と神への愛着を感じる様になるのである。これが、ライプニッツの世界の秩序体系の真理獲得への努力と道徳思想の連帯である。

リットは、ライプニッツの思想の中で、モナドの世界パースペクティブ（世界像）の多様性が統一される〈方法（Wie）〉に最も強い関心と疑問を抱いている。リットによれば、「空間的な像は、モナド的な世界視の限らない個性化（unbegrenzte individualisierung der monadischen Weltansichten）が感覚的に捉えられる様にするのに役立つに違いない。」¹⁹⁾ 即ち諸々の世界視は、同一の都市の光景が様々の異なった立場から展望されると同様に、それらの視点から互いに区別される。各々のモナドは、それ固有の、個性的な視点をもち、そこから世界の特殊なパースペクティブを形成する。様々の視点から世界を表象するモナドは、実際はライプニッツの予定調和説によれば、可能なものを完全性の程度に応じて魂（精神）と身体（世界）の調和において実現するが故に、互いに矛盾することなく、世界の秩序体系の中に位置づく、即ち適応することができる。これは、現代においては、形而上学的命題と見做されている。リットは、20世紀前半における世界観の対立に直面して、この点にライプニッツの「相反するものを調和させることへの衝動（Drang zur Harmonisierung des Widerstreitenden）」を見ている²⁰⁾。だが他方において、彼は、彼自身の精神科学の立場から、ライプニッツの魂の精神への発展の思想の中に多様な世界観の対立を和解させる〈精神的現実の構造〉を見出している。即ち彼は、特殊な視点に固定された世界像（観）の多様性と自己自身を導く構造論的な知識の統一を問題している。人間は、特殊性を越えて統合を勝ち得るために、多数の異なる視点を見渡せる展望台に昇らねばならない。彼は、「人間は、（モナド的立場を自覚し、そこから解き放たれる一筆者挿入）可能性を行使する時に、〈その〉人間についての真理、即ち世界における、また世界に対する〈その〉人間の位置づけについての真理を彼に開示する知識に精通するのである。」²¹⁾と述べている。この知識が正にリットの精神科学的知識に他ならない。

II. 精神科学としてのリットの構造論と教育学

リットは、予備指導の特質を「指導」と「放任」の両立場を同時に逆行する精神、即ち言語（的理性）に見出している。言語的理性は、事柄の固有体験を概念で表現する能力であり、彼の構造論の根本概念の一つである。彼は、「認識と生活」、「個人と社会」等において個人と超個人的（überpersönlich）な力の関係の基本構造、即ち精神的世界の構成、我と汝の相互性（Reziprozität zwischen Ich und Du）における体験－表現－理解の機能連関及びパースペクティブの形成等を分析している。「指導」の特質は、教師の側の言語、即ち理念的内容（ideeller Gehalt）の形成力（Formkräfte）に、また「放任」のそれは、生徒の側の陶冶理想の個性化に見出される。では、特に陶冶理想の個性化は、構造論的にはどの様に考察されることができるのか。第二章において、本稿は、教師と生徒と精神的世界の関係の解明を試みて、リットの精神科学の立場から見れば、予備指導の問題、即ち教育（学）－教師－は如何にして生徒の個性的人格を理解し、指導すればよいのかについて明らかにする。そうして彼が、ライプニッツの世界の秩序体系の真理を通して自己自身の真理と行為へ至るといふ思想や「個体（性）化」、「パースペクティブ」等の諸概念をどの様に継承しているのかについて考察したい。

(1)精神科学としての構造論

リットは、「認識と生活」において、文化全体の生活諸力と結合した「機能 (Funktion) としての科学」が精神的現実の連関を理論的に把握することによって、各個人の目的設定 (Zwecksetzung) に明白な土台を与えようと試みている。彼は、この著作において、特にディルタイの理解の目的論的構造に依拠している。なぜなら、その構造はリットの構造論の課題である体験－表現－理解の機能連関及び超個人的な生活連関の把握に役に立つからである。だが彼は、他方において、ディルタイの連関とは異なる〈表現－理解の連関〉を展開している。諸科学の認識作用と精神的世界の構成を対象にするリットの精神科学は、ライプニッツの個性的視点、表象 (現) 能力、欲求と深く関わるのである。所謂、個別的な精神諸科学の概念は、その根底に「体験された価値性質 (認識価値)」を持つが故に、それは、精神科学的認識、即ち理解の対象になることができる。彼によれば、「人間は、生活が合致する記号 (Zeichen) において事柄的に〈意志疎通する (sich verständigen)〉だけでなく、人格的に (persönlich) -〈理解する〉。」²²⁾ 即ち体験された価値性質は、人格的に理解されて、精神的世界の意味連関を構成することができる。人格的な理解は、第一に、事柄的な意志疎通の根底にある価値を理解する機能を持つだけでなく、第二に、目的設定、即ち価値規定的な機能をすら持つのである。彼は、「〈価値規定的な〉機能は、精神の必要な発展方向にある主観の活動であることが判明する。」²³⁾ と述べている。生活する諸個人の目的設定は、この理解の諸機能に依存している。精神的世界の形成は、個人がその内部で各々の目的に向って自己を実現することによって、新たな全体性へ前進することができる生き生きとした運動である。リットの精神科学は、生活領域に対応する諸科学の価値性質から精神的世界の全体性を構成しようとするのである。

リットは、更に「個人と社会」において、ディルタイの体験－表現－理解の連関を我と汝の相互性における〈意味の媒介運動〉として解明している。それは、上述の連関においては、特に表現－理解の連関に焦点を当てたものである。彼によれば、「〈対話〉の相互性は、最も明確な輪郭において、自我と世界の関係が我々に明白になる〈弁証法的〉事態の諸特質を浮び上らせる」ことができる²⁴⁾。我と汝のパースペクティブの相互性は、両者の世界体験が互いに干渉して形成されるが故に、モナド的な孤立性を克服すると同時に、同じ状況の体験における特殊性、即ち比類無き個性を理解する前提になる。リットの構造論、即ち精神的現実の現象学的分析は、各々の個人のパースペクティブが如何にして形成されるのかについての構造的なく如何に (Wie) を叙述している。私の個人的生活は、身体 (Leib) の表現運動と象徴化 (symbolisierend) 運動を通して、汝と共有可能な社会生活に発展する。汝は、顔つき、振る舞い、行為において直接的に自己を表現するだけでなく、シンボルにおいて「何か (etwas)」を表現することになる²⁵⁾。身体的表現と象徴的表現の担い手である自我の同一性は、我と汝の相互性の土台である。象徴化運動には、特に両者の間にそれ自体で基礎づけられた意味領域が介入せざるを得ない。その意味内容は、我と汝の世界についての固有体験が交差し合う「〈事柄〉領域を通る迂回 (Umweg durch die Zone der <Sache>)」によって、新たに蘇生されることができる。更に、生活領域の対象、即ち何かの把握によって、当然「最も内的で最も固有なものは、シンボルにおいて把握される意味の無時間的次元に同化される必要がある。」²⁶⁾ 事柄の固有体験は、認識する (例えば、汝の) 自我の価値性質から把握され、象徴 (Symbolik) 体系に帰属する。自我は、

何かを表現することによって、正に自己を表現するのである。即ち、ここでは感性的認識において理念（想）を表象するライプニッツのモノダの個性的中心、即ち視点を見て取ることができる。

(2)構造論的教育学における陶冶理想の個性化

リットは、『現代の哲学とその陶冶理想への影響』において、生活（と理念）の弁証法を提唱し、生（命）の哲学及び教育学の特質、即ち精神の客観的内容に対する生命の創造的優位や心的諸力の調和的發展を批判している。²⁷⁾ 生の教育学の調和的發展観の代わりに、彼の教育学の立場では、生活と理念の相互抗争（Auseinandersetzung）が真の創造的精神を発現させ、また促進させる活動となる。彼は、論文「教育学」において、「創造的精神は、生活諸力と闘争することによって十分な意義に高められる。」²⁸⁾と述べている。生活と理念の相互抗争は、事柄の固有体験に基づく意味の媒介運動であり、正に生徒の言語的理性が行なう人間形成の活動、即ち陶冶理想の個性化である。リットによれば、生徒が自ら設定する陶冶理想は、彼自身が「そこにおいて、自己確認と目標規定を追求する十全な集約された生活の立場（Lebensbestand）の表現」である²⁹⁾。諸科学の概念に含まれる価値性質あるいは認識価値、即ち理念が生徒の固有体験を照明することによって、彼は自ら理念の意味を理解して、生活に根付かせることができる。そこでは、それ以上に生徒の理念の意味理解と行為は、提示された概念以上の意味内容を形成することができる。それ故に、彼は何かを表現することによって、正に自己を創造的に表現する。即ち彼は、先ず「観察する者（der Betrachtende）」として、諸科学の概念を歴史的・文化的な社会生活において吟味し、次に「行為する者（der Handelnde）」として、理念の新たな意味の実現のために、自己のパースペクティブの中に組み入れることになる。ここにおいて、リットは言語、即ち理念的内容の形成力を見ていると言える。こうして生徒は、自己確認や目標規定を行なう生活の立場を形成することができる。生徒の固有体験による理念の新たな意味の実現は、生活の立場と個性的なパースペクティブの存立基盤である。

だが、生徒固有の表現、即ち理念の意味実現は、教師の背後にある客観的水準に高められねばならないことも事実である。ここで、精神的世界の構築が問題になる。生徒の生活と理念の相互浸透は、『科学 陶冶 世界観』において、個人的生活の世界観との統合に発展している。リットによれば、理性的な人間は、歴史的現実を「彼の活動的な生活のパースペクティブの中に取り入れずにはいられない」が故に、「彼自身と彼の〈対象〉の外的対立を絶えず止揚する歴史的現実の不可欠の契機」となる³⁰⁾。個人的生活の世界観との統合は、正にリットの精神科学的教育学の課題である。彼は、『指導か放任か』において、「人間の全体構造は、数多くの対象と活動を適切に等級づけられた全体に秩序づける理想的中心を探求する。」³¹⁾と述べている。理想的中心は、生徒の陶冶理想の諸対立の解消のために、指導を理念的に規格化する原理である。彼の精神科学における自己熟慮（Selbstbesinnung）は、この理想的中心を発見するために、諸科学の根底にある価値性質あるいは認識価値の全体—そこには、当然諸対立が含まれる—を照明し、精神的世界の全体を統合を可能にする価値の中心へと向って構成し直し、整理しようするのである。専門諸科学の〈精神の全体〉との関連を探求する自己熟慮の試みは、現代の精神的世界を解明する有力な方途の一つであると思われる。生徒は、この精神的世界において生活と理念の相互抗争によって陶冶理想の個性化を実現せねばならないのである。教育学は、諸科学の認識価値

を人間と世界の直接的な出会い、即ち世界についての印象 (Eindruck) において解明して、諸科学の、精神の全体への関連づけを遂行する一教師は、この世界印象から生徒を諸科学の中へ導入する一と同時に、それに基づいて生徒は、諸科学の認識価値と成果を吟味し、世界における、また世界に対する自己 (の視点) の位置づけを知ることができる。

(3) リットの精神科学の人間学的性格

さて、世界における、また世界に対する〈その〉人間—あるいは〈その〉科学 (者) —の位置づけは如何にして行なわれるのか。即ち世界像 (観) の多様性は、如何にして調整され、統合されるのか。自然及び精神諸科学が方法論的前提として持つ世界観の統合こそは、リットの精神科学の課題である。即ち全ての個別的な科学の認識価値と方法論は、彼の精神科学の立場から、それらの思考の本質、可能性並びに限界について反省され、調整されねばならない。人類の歴史を振り返れば、前科学的な世界 (自然) との出会いが科学の出現に先行している。彼は、論文「哲学と精神諸科学」において、「人間に与えられている世界の科学的な把握の全ては、前科学的な世界との出会いの懐から産出されたに違いない。」³²⁾と述べている。自然についての世界印象を素朴に受け取る人間に自然が自己を示す形態は、自然科学的思考によって表現される。その遂行において、世界印象の中で数量化に適するものは法則となり、それに適さぬものは削除される。それに対して、精神諸科学は、人間の決断する意志と無関係ではあり得ない現実の前科学的な出会いから生起する。リットによれば、哲学としての〈精神科学 (Wissenschaft vom Geist) 〉が諸科学の対立する世界観を提携させる精神的世界の構造を透明にする。彼の精神科学は、我々の行動する〈意志に義務づけられた思考 (ein dem Willen verpflichtetes Denken) 〉に他ならない。なぜなら精神科学的思考は、「意志の導く行為が干渉するであろう〈状況〉を見渡す」ことによって、意志の決断に役に立とうと努力する、即ち「意志は、その限りにおいて、事柄の实情についての〈理論的な〉解明を必要とする。」³³⁾からである。魂が世界の秩序体系の真理—外的なもの—の中へ浸透することによって、自己意識を獲得して、自己の視点から世界 (像) を表象し、また創造的に活動する精神へ至る—この精神は、更に世界の能動原因及び目的原因としての神を認識するのであるが—というライプニッツの思想は、ヘーゲルによって初めて適切な表現へ齎らされた。即ちそれは、自己意識はその他者存在において自己自身のもとに在る、厳密に言えば、「(知識の—筆者挿入) 内容は、自我がその他者存在において自己自身のもとに在ることによってのみ、概念的に把握されている。」³⁴⁾というヘーゲルの命題である。但し後者の場合は、絶対的精神が神に取って代わった。リットの場合は、言語的理性はあくまで個人の理性である。ここに、彼の精神科学の人間学化の傾向を見ることができる。彼は、「精神は、それ自身と区別されるものを通る回り道をしてのみ、〈他者〉を通り抜けてのみ、外観はそれ自身の中心から離れ、また遠ざかる様に見えてのみ、実は〈自己自身へ至る〉、即ち自己自身を完全に意のままにする、心的内容を能動 (現実—筆者挿入) 的形態に変える。」³⁵⁾と述べている。これは、事柄の固有体験に基づく陶冶理想の個性化、即ち個人の自己実現を表現したものである。精神科学は、生活領域に対応する諸科学の認識価値から精神的世界の構成を試みて、特殊なパースペクティブから世界についての真理を表現する個人及び科学 (者) に、視点の特殊性を明確にさせ、自己及び他者の思考の本質、可能性並びに限界を知らせる企てである。彼は、世界観の諸対立が個人の理性を越えた世界精神に起因しないが故に、個人の理性と

精神科学的思考によって解消されることができると確信している。言語的理性は、生活言語及び世界についての経験科学的な概念を形成すると同様に、構造論的概念と命題を把握する認識能力でもある。彼は、「精神科学的認識の構築における普遍的なもの」において、諸科学は、帰納法の論理的性格を荷なわない「個性化する (individualisierend) 認識」³⁶⁾から出発すると述べている。即ち個別的な精神諸科学は、日常生活に由来する認識である。精神科学は、それらを人間学的に反省して、生活領域に対応する諸科学の統合及び精神的世界の構築を目指すものである。従って精神科学の概念と命題、即ち普遍的なものは、正に生活する個性的人間の世界についての表象 (印象) あるいは像の形成を頼りとし、また理性、即ち生活と科学の連結による世界観の統合に依存している。正に精神科学は、主観と客観 (対象) が同一である根源的な事態において根本概念と命題を形成せねばならないのである。

註

- 1) Theodor Litt, Ethik der Neuzeit, Oldenbourg, München 1927 S. 78. 参照『近世倫理学史』関 雅美訳 未来社 1956
- 2) Gottfried Wilhelm Leibniz, Vernunftprinzipien der Natur und der Gnade, Monadologie, Meiner, Hamburg, 2. Aufl. 1982 S. 39.
- 3) G. W. Leibniz, Metaphysische Abhandlung, Übersetzt und mit Vorwort und Anmerkung herausgegeben von Herbert Herring, Meiner, Hamburg 1957 S. 67. 参照『形而上学叙説』竹内良知訳 世界大思想全集9 河出書房 1954
- 4) G. W. Leibniz, Neue Abhandlungen über den menschlichen Verstand, neu übersetzt, eingeleitet und erläutert von Ernst Cassirer, Meiner, Leipzig 1926 S. 461-462. 参照『新人間知性論』米山優訳 みすず書房 1987
- 5) G. W. Leibniz, Metaphysische Abhandlung, S. 65.
- 6) G. W. Leibniz, Neue Abhandlungen... S. 461.
- 7) Th. Litt, Leibniz und deutsche Gegenwart, Dieterich'sche Verlagsbuchhandlung, Wiesbaden 1946 S. 24.
- 8) a. a. O., S. 29.
- 9) G. W. Leibniz, Monadologie, S. 49. 参照『单子論』竹内良知訳 世界大思想全集9 河出書房 1954
- 10) a. a. O., S. 51.
- 11) a. a. O., S. 65.
- 12) G. W. Leibniz, Metaphysische Abhandlung, S. 65.
- 13) G. W. Leibniz, Neue Abhandlungen... S. 239.
- 14) G. W. Leibniz, Metaphysische Abhandlung, S. 31.
- 15) G. W. Leibniz, Vernunftprinzipien der Natur und der Gnade, S. 7.
- 16) G. W. Leibniz, Monadologie, S. 65.
- 17) G. W. Leibniz, Monadologie, neu übersetzt, eingeleitet und erläutert von Hermann Glockner, Reclam, Stuttgart 1954 S. 65.
- 18) G. W. Leibniz, Monadologie, S. 53.

- 19) Th. Litt, Leibniz und deutsche Gegenwart, S. 30.
- 20) a. a. O., S. 35.
- 21) a. a. O., S. 32.
- 22) Th. Litt, Erkenntnis und Leben, Teubner, Leipzig 1923 S. 142.
- 23) a. a. O., S. 184.
- 24) Th. Litt, Individuum und Gemeinschaft, 3. Aufl. Teubner, Berlin, 1926 S. 107.
- 25) a. a. O., S. 163.
- 26) a. a. O., S. 171.
- 27) Th. Litt, Die Philosophie der Gegenwart und ihr Einfluß auf das Bildungsideal, 2. Aufl. Teubner, Berlin, 1927 S. 67 .
- 28) Th. Litt, Pädagogik, in : Die Kultur der Gegenwart, hrsg. von P. Hinneberg, 3. Aufl. Berlin 1921 S. 305.
- 29) Th. Litt, Die Philosophie der Gegenwart... S. 52.
- 30) Th. Litt, Wissenschaft Bildung Weltanschauung, Teubner, Berlin, 1928 S. 127.
- 31) Th. Litt, Führen oder Wachsenlassen, Teubner, Berlin 1927 S. 68.
- 32) Th. Litt, Die Philosophie und die Geisteswissenschaften, in : Konkrete Vernunft, Festschrift für Erich Rothacker. hrsg. von G. Funke. Bonn 1958 S. 16.
- 33) a. a. O., S. 18.
- 34) Georg Wilhelm Friedricch Hegel, Phänomenologie des Geistes, Werke 3 Suhrkamp, Frankfurt am Main 1970 S. 583. 参照『精神現象学』榎山欽四郎訳 世界の大思想1 河出書房 1975
- 35) Th. Litt, Leibniz und deutsche Gegenwart, S. 27.
- 36) Th. Litt, Das Allgemeine im Aufbau der geisteswissenschaftlichen Erkenntnis, Meiner, Hamburg 1941 S. 9.